

国際芸術センター青森（AACC）のアーティスト・イン・レジデンスには、ボランティアによる市民サポーターの力が欠かせない。学芸員らスタッフだけでなく、市民にも作家のリサーチや制作に関わってもらうことは、開館前からのコンセプトだった。開館前年の2000年に国内外の11作家が滞在制作したイベントには多くのボラ

5 市民とともに

作家の支援や創作体験

ンティアが集まった。施設の立ち上げから関わった元学芸員の日沼禎子さん（現・女子美術大学教授、青森市出身）は「地域の中にボランティア組織をつくった越後妻有アートトリエンナーレ（新潟県）などを参考に、市民とゼロから一緒にやろうと考えた。作家

最大級のプレス機を使って版画ワークショップを企画するなど積極的に活動を続けているAIRS。現在中心のメンバーは10人ほどだ。最初期からのメンバーで、同市のギヤラーレイドルを主宰する高樋忍さんは「アーティストの口を通して、青森の良

大1年の石塚俊平さん（青森市出身）は、作家との交流がとても楽しいという。「青森にいなから自分が想像もつかないような経験を聞けることはとても勉強になる」と話す。同大1年の伊藤羽駒さん（山形県出身）は「仕事の内容が変わった」という。「仕事と言え

CACの自然の中で創作体験をしたり、作家が学校を訪問してワークショップをすることもあり、年間20〜30校ほどが参加している。「もっと大きな葉っぱあたりながら紙に貼り付け、キツネやクマ、キリンなどを表現した。原昌志校長は「大人では思いつかないようなアイデアを持っていてびっくりした。いいプログラムだと思う」と制作を見守った。11年から昨年7月まで学芸員を務め、教育プログラムを担当した金子由紀子さん（現在カナダの大学院に在学中）は「子どもの頃に一度でもAACCを訪れたことがあれば、大人になってからも思い出して、訪れやすくなるのではないかと思っ

とサポーターのいい関係性ができた時はうれしかった」と当時を振り返る。03年に正式に発足したサポーター組織「AIRS（エアーズ）」（自任はるみ会長）は、作家の制作補助のほか、英語が堪能なメンバーが海外作家の通訳をしたり、自宅に招いて青森の文化を体

に約1万8千人が訪れて大きな話題を呼んだ「ナシ」シリーズの「ナシの街」（03年）、若手作家が商店街に住み込みながら作品制作した「怒濤の街」（06年）などにも取り組んだ。コロナ禍の中でも、動画配信によるアートフェスやAACCにある世界

い評判が世界中に広がっていきほうれい」といふ。「具内美術施設の5館連携が進む中、訪れた観光客は地元の人や面白も一回考え直さなければと感じた」と視野を広げるときっかけになったようだ。一方、AACCは教育普及の一環として、学校向けのプログラムを行っている。子どもたちがAACCの自然の中で創作体験をしたり、作家が学校を訪問してワークショップをすることもあり、年間20〜30校ほどが参加している。「もっと大きな葉っぱあたりながら紙に貼り付け、キツネやクマ、キリンなどを表現した。原昌志校長は「大人では思いつかないようなアイデアを持っていてびっくりした。いいプログラムだと思う」と制作を見守った。11年から昨年7月まで学芸員を務め、教育プログラムを担当した金子由紀子さん（現在カナダの大学院に在学中）は「子どもの頃に一度でもAACCを訪れたことがあれば、大人になってからも思い出して、訪れやすくなるのではないかと思っ

2003年のアーティスト・イン・レジデンスで、作家の明さん（右から2人目）の制作を手伝ったAIRSのメンバーら（大友麻紗子、山谷佳澄）

